

支倉常長遣欧使節400周年

*今年2013年は、支倉常長遣欧使節団400周年の記念すべき年です。彼は封建大名伊達正宗につかえるサムライでした。太平洋を渡り、メキシコ、キューバを経由、スペイン、イタリア、フランスを訪れた最初の日本人です。

彼とその一行は、スペイン国王、ローマ法王とも謁見出来ました。

*この遣欧使節400周年は、スペイン日本両国にとって重要な意味を持っているので、スペインは今年 2013年 を、**El Año de Japon** と宣言、日西両国の関係が更に強化され新たな発展につながることを望み、外務大臣も来日されました。

*私は 支倉常長一行のヨーロッパ訪問について、特にスペイン滞在中のことに的を絞り、少し詳しくお話をしたいと思います。日西クラブは スペイン大使館のバックアップを受け、日西両国の経済友好関係発展を目的とするクラブであり、今 そのクラブの会員の皆様を前にお話をしていることを十分承知しています。

*支倉常長が、太平洋を横断して、ヨーロッパに到着した、最初の日本人であることは確かです。しかしヨーロッパを訪問した最初の日本人ではないのです。イエズス会メンバーの立場から、このことを明らかにしたいと思います。

*大名島津貴久につかえる武家の出身で、ベルナルド・デ・サツマ 日本名は多分「カワナベ」という苗字の島津家のサムライがおり、その息子で、ベルナルド・デ・カゴシマという青年が実は、最初にヨーロッパを訪問した日本人なのです。

彼は1549年8月に偉大なイエズス会の宣教師ザビエルに出会ったのです。ザビエルはその年の8月15日に鹿児島に到着したのですが、ベルナルドは当時22歳ぐらいだったと思います。ザビエルの人柄とその教えに感動し、ザビエルの手でキリシタンの洗礼を受けました。そのあとは、ザビエルの宣教の旅すべてに同行しました。鹿児島から平戸、平戸から山口、京都、それからまた山口へ戻り 最後は豊後まで、正確に言うと 現在の 大分の港町、府内町です。

ベルナルドは、ザビエルと共に、1551年11月インドに向け日本を出発しました。

ゴアで、ザビエルと別れ1553年3月ポルトガルに向かいました。

アラビア海を下って、インド洋を渡り、南からアフリカ大陸沿岸に沿って航行、嵐の中大西洋を進み、ベルナルドを乗せた船は、1553年9月、ポルトガルの首都リスボンに到着しました。

1554年の中ごろ、彼は、修道士見習いとしてイエズス会に入り、そこでいわゆる最初

の修道誓願式を行いました。それからポルトガル語を学び更にラテン語やイタリア語も勉強した後、イエズス会の創設者、イグナシオ・デ・ロヨラに呼ばれてローマへ行くことになりました。1554年7月17日に、スペインに入り、サラマンカ、セゴビア、バレンシアを経て、1554年12月バルセロナからシシリア島に向け出帆、更にそこからイタリア半島に向かい1555年1月7日、ローマに到着しました。

そこで、彼は、イグナシオ・デ・ロヨラにとっても好い印象を与えたので、ロヨラは彼を当時のローマ法王パウロ4世に謁見させました。その後1555年末、仲間のイエズス会修道士達とポルトガルに帰り、コインブラのイエズス会コレヒオに入ります。しかし度重なる旅と休む間もなく新しい経験を重ねたことで、極度の疲労に陥り、残念なことに

1557年2月に亡くなりました。彼の棺は、コインブラのイエズス会教会に埋葬されました。

* 今日の本題のテーマと少し離れてしまったことをお許し願いたいのですが、若し、どなたか、ベルナルド・デ・カゴシマにご興味あるのであれば、彼について日本語で書いた私の本が 本年末出版される予定ですのでお知らせ致します。

* 私としては、支倉常長は、太平洋を渡った最初の日本人ですが、ヨーロッパに行った最初の日本人ではなく2番目であり、あくまでも 最初の日本人は、大西洋を渡りヨーロッパに行った青年ベルナルド・デ・カゴシマだという歴史的事実を、強調したかったのです。

* 然し今回のテーマは、「日本初の外交使節 スペインへ行く」なので、ベルナルドは、支倉のようにスペイン国王やローマ法王から、厳粛な特別の謁見を許されたのではなく
イグナシオ・デ・ロヨラを創始者とするイエズス会修道士たちの手で、つつましく謁見したにすぎません。

* 処で スペインへ行った最初の日本の外交使節団はどのようだったのでしょうか。
そもそもは、1609年、スペインのガレオン船”サンフランシスコ号”が、マニラからアカプルコへ向かう途中、嵐で東京の近く千葉の海岸で遭難したことに始まります。乗組員は救助され、手厚く介抱されました。艦長のロドリゴ・デ・リベロは当時の將軍徳川家康に謁見しました。
同じ年の11月29日、日本当局は、ロドリゴ・デ・リベロとの間で通商条約のような文書に署名しました。その内容は、スペイン人は、日本の東部に洋風工場を建設しそこで鉱山開発及び金精錬に必要な知識を日本人に教授すること。またこのためにヌ

エバエスパニャから鉱山技師を日本へ派遣すること。一方 スペインの船舶は、必要な場合は、日本へ寄港できること。またこの条約締結のため、日本の外交使節をスペイン王室（当時の国王はフェリッペ2世）へ派遣する用意があること等となっています。

*そこで、セビリア出身のフランシスコ会宣教師で1603年来日したルイス・ソテロ神父が、自分が、ヌエバエスパニャへ帰国するスペイン人一行に同行し、かの地でスペイン、ヌエバエスパニャ、日本との通商交易実現のための外交交渉を行いますと徳川家康に申し出ました。

スペインにとって当時関心があったのは、アジアでの布教活動の拡大と日本のような国と交易することでした。というのは、「金銀の島々」が日本にあると思われていたからです。それに日本の海岸でメキシコ・スペイン航路の船が難破したり座礁したりしていたからです。

一方日本にとっての関心事は、ラテンアメリカとの交易でした。そのためにはスペインと交渉する必要がありました。

*かくして、ソテロ神父はサンフランシスコ号で難破したスペイン人達と共に、徳川政府の海軍顧問英国人ウイリアム・アダムスの建造した新しい船に乗り 日本を出帆しました。

スペイン人は、その船をサン・ブエナ・ベンテウラ号と命名、一行には22名の日本人も加わりました。

ヌエバエスパニャでソテロ神父は、スペイン副王ルイス・デ・ベラスコに謁見。副王は日本へ大使の資格で人を派遣することに同意します。この任に当たったのが探検家セバスチアン・ビスカイノでした。並行して与えられた彼の任務は、「金銀の島々」を発見することで、この神秘的な島は、日本の東にあるとスペイン人は考えていました。

*この最初のメキシコ外交使節として、ビスカイノは1611年日本に到着。沢山の大名達の前で、将軍徳川家康に度々謁見しました。しかしセバスチアン・ビスカイノの日本人に対する高慢で無礼な態度、これに加え、スペインの布教活動は、単に日本を征服する戦略に過ぎないのではないかとの日本側の懸念、ましてやその上に、他の地域を征服した時のスペインのやり方を告げるウイリアム・アダムスのアドバイスもあり、日本人は極度に警戒観を強め、結局 確たる約束を結ぶには至りませんでした。

一方、ビスカイノは、日本の沿岸を船で乗り回し、「金銀の島々」を探すのに専心。悪天候で船が破損、已も得ず東京近くに戻らざるを得なくなりました。

*そこで徳川将軍は、日本でガレオン船を建造することを決断、その船で、日本の外交使節団と一緒にビスカイノをヌエバエスパニャへ帰国せしめることにしました。そしてこのプロジェクトを仙台の大名、伊達正宗が担当することになったのです。好奇心を掻き立てるのは、その大名の領地を、少し前に大津波が襲い、たくさんの犠牲者を出す一方、その土地は広範囲に亘り壊滅的被害を受けました。従って、伊達正宗としては、このプロジェクトに協力し、自分の手で、スペインおよびヌエバエスパニャとの条約締結に至れば、津波で疲弊した仙台藩にとっても利益になり自分の名声も上がると考えたのでした。そこでもっとも有能な家臣の一人支倉常長を呼び、この外交使節の長になることを命じました。

*日本名 伊達丸、のちに”サン・フアン・パウチスタ号”と呼ばれたガレオン船建造に当たり、将軍は、日本人専門家チームを結成、800人の船舶専門家、700人の鍛冶職人、3000人の大工を任命しました。茲で再び、フランシスコ会のソテロ神父が、サムライ一行の案内役として名乗りを上げました。

*ガレオン船が完成すると、支倉使節団は、1613年10月28日、今の宮城県石巻、当時の月の浦港をメキシコのアカプルコに向け出帆。乗員総数約180名。内訳は将軍指名のサムライ10名（実際は、船手奉行向井将監が選考）、支倉を長とする仙台藩サムライ12名、120名の商人、水夫、雑役人、約40人のスペイン人およびポルトガル人でした。

*一行は、3か月かけて太平洋を航海し、1614年1月25日 アカプルコに到着。

全員、大歓迎を受けます。外交使節はしばらくメキシコシティに滞在、そこで副王に謁見、”タイルの家”と呼ばれる美しい宮殿に宿泊します。

それからすぐにベラクルスへ行き、そこからハバナへ向け出帆することになります。ベラクルスでは、スペイン行き大西洋航路を運航するドン・アントニオ・デ・オケンド艦隊に加わり、サンホセ号で1614年6月10日出港します。

然し、支倉は、日本人一行の大部分をアカプルコに残し、自分が任務を終えスペインから帰るまでそこで待つように命じます。

*サムライ一行を乗せたサンホセ号は、1614年7月ハバナに到着しました。したがって支倉は、キューバの地を踏んだ最初の日本人ということになります。今、ハバナ

湾の入り口にある小さな公園に、彫刻家ツチャ・ミズホ 製作の支倉常長像が立っています。

- * ハバナから一行は、スペインへ向け出発、今度は大西洋を渡り、1614年10月セビリャに到着します。碇を下したのは、当時の港サンルカル・デ・バラメダ、近隣の土地の人はコリア・デル・リオと呼んでいるグアヤキビル河の入り江の港で、商品の物流、輸出入の拠点でした。一行は、1615年1月、国王フェリッペ3世にマドリッドで謁見するまで、そこに待たされていました。

マドリッドに入るときは、その前にトレド市も訪問していました。

支倉常長は、1615年2月17日、国王フェリッペ3世およびフランシア王妃臨席のもと デスカルサス・レアレス修道院の祭壇で 洗礼を受け、当時の首相レルマ伯爵とバラハス伯爵夫人がパドリーノ役を務めました。

洗礼名は、国王に因んでフェリッペとフランシスコ会ソテロ神父の影響でフランシスコ・デ・アシスの名をとり、フランシスコを採用しました。

ソテロ神父はその時の様子を次のように記しています。

「大使（ハセクラ）は、深い信仰心と愛情に満ちて洗礼を受けた。洗礼の聖水が施された後、祭壇では、神をたたえる聖歌がはじまり、オルガンが響き渡り、天国はかくばかりと思われた。洗礼式が終わると、私たちは司祭とパドリーノの処へ行き、感謝の言葉を述べると、とても満足され、大使におめでとうと言われた。

レルマ伯爵は、国王陛下がお呼びだからと、自らの手で大使と私を導かれた。

国王陛下の御前で、その足元にひざまずくと 陛下は、立つようにと仰せられ、深い愛情と満足なご表情で、大使を抱擁され、おめでとうと言われた。

ハセクラは、国王に、自分は世界一番幸せ者だと述べた。なぜならば、先ずキリスト教徒になれたこと、自分の望みが達成されたこと、名誉ある爵位を受けたこと、国王臨席のもと洗礼を施されたこと、畏れ多くも国王の名を洗礼名に付けるようにと命じられたこと。神に感謝する。またこのことが日本に伝われば、国王陛下に大きな幸をもたらすであろうと申し上げた」

* 国王臨席のもと洗礼式が行われたということは、日本とスペイン世界との通商条約締結提案に、スペイン側が、特別の配慮を払っていたことを表しています。

然し、使節がローマへ向け出発する前、まだスペインに滞在している時に、徳川政府が、キリスト教布教の自由に関する政策を厳しくしてきたとのニュースが伝わって来ました。それは支倉使節団には不利なことでした。

使節一行は、スペイン北東部の旅を続け、バルセロナから船に乗り途中、フランスの南部セイント・トロペに休憩のため立ち寄ったのですが、そこで 正装の着物をまとい、刀を腰にさした日本人を見て大騒ぎになりました。 当時の記録によると、箸で食事をするの

が珍しい、鼻をかむのに絹のハンカチを使い、それを一回使うだけで道に捨ててしまうので、人々は、宝物のようにそれを競って拾ったと記しています。

*ローマでは、支倉とその随員は、法王パウロ5世に謁見、数々の祝祭行事が行われたのですが、日本からますます不安なニュースが伝わってくるので、協力協定のようなものは一切結ばれませんでした。

イタリアに残した足跡としては、チビタベッキア市に支倉の銅像があります。彼は、ローマ市民の特権を授与されていたのです。

*1616年の1月、支倉一行はスペインのコリア・デル・リオに戻り、そこからアカプルコ、フィリピン経由帰国することになりました。

スペイン政府はもはや、日本と通商条約を結ぶ意思はありませんでした。キリスト教に改宗した日本人たちは、日本からのニュースに不安を募らせました。支倉に随行したほぼ30名のうち約10人は、コリア・デル・リオにとどまることを決意し、そこに居を定めることにしました。

これ等サムライの子孫たちが現在「ハポン」という苗字を付けています。記録では約1000人がこの苗字を持っています。

コリア・デル・スルでは、最初の苗字が「ハポン」の人321名、二番目の苗字が「ハポン」の人9名、一番目と二番目ともに「ハポン」の人510人。全部で830人です。

セビリャにも、「ハポン」の苗字の人が180人いるので、約1000人が「ハポン」苗字ということになります。

他にも日本の子孫を思わせる「カロ」という苗字の人がいます。これは支倉の「クラ」から来たものと思われます。コリア・デル・リオには、グアヤキビル河を背にした支倉の銅像が立っています。

*、スペインに留まる決意をした10名を除く支倉使節一行は、日本へ帰国の長い旅路につきます。1617年7月セビリャを出発、アカプルコに到着してから、50年前からスペインの植民地になっているマニラに向います。そこに一行は2年間滞在しました。直接日本へ行かなかった理由は、徳川政府のキリシタン迫害が益々激しく残忍になっていたからです。

*漸く1620年9月、支倉は、今の宮城県の海岸の地を踏みました。

一方、ソテロ神父は1622年再度日本入国の危険を冒します。しかし禁教のキリスト教を布教したとして、すぐに逮捕され、2年後現在の長崎県大村で火あぶりの刑に処せられ殉教します。

*支倉常長は、日本へ帰国すると、キリスト教を棄教しないだけでなく、彼の妻も息子もキリシタンになりました。

唯 藩主伊達正宗に危害が及ばぬよう、沈黙の生活に入り、外交使節の任務を終えて帰国2年後に亡くなりました。

*支倉の外交使節は、パイオニア的なものがあり、スペインの中に足跡を残しただけでなくフランスやイタリア、メキシコやキューバにも何らかの影響を与えています。それ故、使節団は各地を旅したことで、日本と世界との最初の絆が、生まれたと言えるのではないかと思います。

*ではこの外交使節の目的は、いったいなんだったのでしょうか？

一番不思議に思えるのは、徳川政府のキリシタン迫害の残酷な情報が、スペイン王国に伝わっているときに、使節団が、日本に於けるキリスト教会を強化するため、宣教師の更なる派遣をスペイン国王に要請していること。支倉本人だけでなく随行員の多くがカトリックに改宗していること。ローマ法王宛て、堺や京都のキリスト教集団の代表者の書状を携行していること等であります。

同時に、通商条約の締結を求めていることもです。無論これは、徳川政府の否定的な情報で、身を結びませんでした。

* 伊達正宗あるいは徳川政府あるいはソテロ神父それぞれを動かした野心や願望は、異なった性格のものではありますが、日本の外交使節をメキシコやスペインへ派遣するということについては利害が完全に一致したのだと思います。

派遣する目的は、通商であったり、政治的なものであったり宗教的なものだったのです。

*当時ヨーロッパもアジアも社会的、経済的には似たよう水準にありました。

その後のヨーロッパ中心全盛期に比べれば、この二つの世界の差はさほど大きくはありませんでした。

日本も既に、ザビエルが1549～1552年に知っていた国ではありませんでした。戦国大名間の戦いに勝ち抜いた徳川家康が、日本を統一し、経済的、社会的、文化的、道徳的にも豊かさを享受していました。

*太平洋横断技術が確立されたので、この海路を使っての人の往来は恒常的になり毎年、いわゆる ”ガレオン・デ・マニラ” が、マニラ、アカプルコ間を就航していました。

この航路を使って太平洋を渡り、メキシコには日本人、フィリッピン人、インド人、東南アジアの人達がおりましたし、また逆にアメリカ大陸からの人もマニラに来ていました。

*このことは、伊達正宗が、メキシコと日本の間、更にヨーロッパのスペインと日本間の通商と友好関係を促進することで、継続的な国際関係を確立しようとの展望を抱いていたと見てよいかもしれません。

*グローバリゼーション現象が顕著な現代において、スペインへ行った日本最初の外交使節を、当時のグローバリゼーションの先駆けとして 高く評価できるのではないかと思います。